

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

代表取締役

(株)みとけ

谷口勝己さん

「地域の発展と活性化を目指して法人化した。皆さんの注目と期待を背に、経営の規模拡大と経営の多角化に挑戦していきたい」と、京丹波町安栖里地区の農業生産法人「(株)みとけ」代表取締役の谷口勝己さん(70)は話す。

同地区は、町の西北部に位置する旧和知町にある。約45畝の農地を、社名の由来でもある三峠山などの山々が取り囲む。同社は2012年6月に、地区ぐるみで立ち上げた安栖里農作業共同組合の生産活動を引き継ぐ形で、25人の出資でスタートした。

規模拡大し多角化を



▶集落の農地保全や後継者育成に力を入れる谷口さん

「この地で生まれた会社だから、安心して農地を預けてもらっている。農地中間管理事業も活用し、毎年1畝ずつ増やして今では17畝の経営面積となった。地区内に耕作放棄地がないのが自慢だ」と谷口さんは胸を張る。

水稲や黒大豆、みず菜の生産とライスセンターの運営を、経営の4本柱に据えて取り組む。中でも地域ブランドの「和知

黒」は、大粒で高品質、市場の評価も高い新丹波黒大豆。同社の看板商品として大切に育てていく方針だ。

また、これまで雇用してきた若い男性社員1人に、2016年からもう1人加えた4人体制で、ハウス12棟60坪のみず菜の周年栽培を行う。JA京都に出荷し、次世代の確保にも取り組む。

谷口さんは「農業経営をさらに発展させていくために、いろいろな可能性に挑戦していく」と意欲を燃やす。今年、加工用の赤実トウガラシ300本を定植して特産「京新清水とうがらし」として取り組む。さら

に20坪で、新丹波黒大豆のエダメメ生産にも取り組む。水稲も新たに飼料用米を取り入れて、14畝で七つの品種を生産し、いずれもJAに出荷する計画だ。

「高齢化が進む中、これからはわが社が地域農業の中心にならないといけない。そのため、いろいろな挑戦ができる株式会社を選択した。これからも、年間を通じた農業生産で雇用確保ができるよう、新たな品目の導入や6次産業化も視野に入れた経営に取り組みたい」と力を込める。

法人所在地 京丹波町安栖里島6番地1。(電)080(8513)0637(谷口さんの法人用携帯)。

法人概要 2012年6月設立。役員3人、正社員2人、パートタイマー6人。水稲14畝、みず菜60坪、新丹波黒大豆1畝。機械設備はトラクター3台、コンバイン・田植え機各1台、ハウス内管理機1台、米乾燥機8台、色彩選別機1台、もみすり機1台。